

## 死を制し、永遠の命を 与えてくださる主イエス

ヨハネ11章28~44節  
2021年2月28日  
松田 基子 師

2月17日に受難節に入り、今日は受難節第2主日を迎えました。一週一週イエス様の十字架に向かって進んで行きます。十字架への道は迫ってきましたが、イエス様は、その前に御自身が、神の子であられること、人の命を真に支配しておられるお方である事を、お示しになりました。それは、信じる者が、

『真にこのお方こそ、命の主メシア、  
救い主である』

事を、確信させる奇跡を起こすことによって示されました。

ところで、イエス様は、神の子の位まで捨てて、神様が御自身の民に選ばれたアブラハムの子孫、イスラエルの民族の中に、人の子として生まれて来られましたが、人の生きる悩み、苦しみ、悲しみを味わい、深い人間理解をもって、父なる神様の御心を人々に伝えられました。それは、真に神の愛に根ざした、人々を神様に立ち帰らせるものでありましたが、律法の伝統に縛られ、形骸化した信仰に固執し、組織と、自分達の立場を守ろうとした、宗教指導者達にとっては、赦し難い危険な存在でした。

宗教指導者達と、彼らに追随する律法主義者達は、自分達の律法解釈に則って、イエス様を石で打ち殺そうとしました。そのためイエス様と弟子たちは、彼らの手を逃れて、ヨハネ10章40節を見ますと、

「ヨルダンの向こう側、ヨハネが最初に洗礼を授けていた所へ行って、そこに滞在された。」と記されています。そこはエルサレムから、おおよそ一日路離れていました。

さて、ここに、エルサレムから3kmばかり離れた

ベタニアから、イエス様のもとに使いの人がやって来ました。それは、マルタとマリアの弟ラザロが危篤状態にあるとの知らせでした。イエス様はラザロをととも愛しておられましたが、すぐにベタニアに行こうとはされず、11章4節で、

「この病気は死で終わるものではない。神の栄光のためである。神の子がそれによって栄光を受けるのである。」

と言って、動こうとはされませんでした。ところがそのまま2日が過ぎ、使いの者が来てから、4日目のことです。イエス様は弟子たちに、

「もう一度、ユダヤに行こう」

つまり、

「ベタニアに行こう」

と言われたのです。

弟子たちはイエス様の身を案じて

「ラビ、ユダヤ人達がついこの間もあなたを石で打ち殺そうとしたのに、またそこへ行かれるのですか。」

と問いました。しかし、イエス様は、御自身が光であられる自覚から、闇を恐れず、光となって照らすために、

「わたしの友ラザロが眠っている。しかし、わたしは彼を起こしに行く。」

と言われました。弟子たちはその言葉通りを受け取って、

「主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう」

『なにも、イエス様が危険を犯して行かれることはないでしょう。』

と止めました。するとイエス様ははっきりと、

「ラザロは死んだのだ。わたしがその場に居合わせなかったのは、あなた方にとってよかつた。あなた方が信じるようになるためである。」

「さあ、彼のところへ行こう。」

と言われ、イエス様は、神様の御計画に従って、立ちあがられました。

「すると、ディディモと呼ばれるトマスが、仲間弟子たちに、わたしたちも行って、一緒に

死のうではないか。」  
と決意を呼び掛けました。

その結果、イエス様と弟子たちは一路ベタニアに向かって出発しました。イエス様はベタニアの近くまで来た時に、マルタ、マリア姉妹の所に使いを出されたのでしょうか。姉のマルタは急いでイエス様を迎えに出て来ました。彼女は、自分たちがイエス様のことで不利になることが無いように気遣って、村の外で待っておられたイエス様のもとに来ますと、イエス様を待ち焦がれていただけに、11章21節で、

「主よ、もしここにいて下さいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに。」

と思いの丈(たけ)を訴えました。マルタはイエス様が、弟が生きている内に来て下さったなら、弟は必ず癒されると確信していました。ですから、イエス様に会うなり、その事を訴えずにはいられなかつたのです。そこには、

『イエス様がすぐに来て下さらなかつた。』  
と言う事への、恨み言も少し入っているようです。

そこで、続く22節の、

「しかし、あなたが神にお願いになることは、何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています。」

という言葉は、何か新しい事をして下さると言う、マルタの信仰を言い表しているかに聞こえるのですが、この後のマルタの言葉から、ここは、しかしではなく、

『なぜなら、あなたが神にお願いになることは、何でも神はかなえてくださる』

と、理由づけに解釈しても良いとの説がありますので、その解釈と取らせてもらいます。マルタは、イエス様が病の癒し主であるとは信じていましたが、それ以上の事はまだ分かっていませんでした。

そこで、イエス様は、23節に、

「あなたの兄弟は復活する。」

と言われました。その言葉に、マルタは小さい

時から教えられて来た、

「終わりの日の復活の時に復活することは存じております。」

と自分の考えを伝えました。イエス様は今や、新しい世界を開こうとしておられました。

25節に、

「イエスは言われた。

『わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。』

と宣言されました。

イエス様は既に、人類の罪を贖うために、十字架の苦しみを受けることを覚悟しておられました。しかし、また、御子を世にお与えになるほど、世を愛し、救いたいと考えておられる、天の父なる神様は、罪の贖いが済んだなら、必ずイエス様を復活させて下さることも、信じておられました。神様は、人類の罪が精算され、罪をお赦しになる事の証明として、御子イエス様を復活させ、信じる人々に、永遠の命をお与えになるのです。ですから、イエス・キリストを信じる者にとっては、肉体の死は、滅びではなくて、天国に向かう通過点にしか過ぎません。永遠の命に生かされるのですから、死は力を持たないのです。まさに、死んでも生きる世界をイエス様が開いて下さるのです。それが実現するのは、唯々イエス様の人類への愛と、神様への従順に掛かっていました。イエス様はそのことを成し遂げてくださるのですが、マルタに詳しい説明はされませんでした。ただ、

「この事を信じるか」

とお尋ねになりました。マルタは深い事は分かりませんでした。イエス様に信頼して

「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであることをわたしは信じております。」

と、ここに驚くべき信仰告白をする事ができました。

イエス様は真にその通りのお方です。世に

来られるはずの神の子、メシアです。メシアは神様が送られる、神様の御子なのです。罪の無い神の御子でなければ、罪深い人類を救うことは出来ません。神の御子でなければ、復活する事も、復活して、人間に永遠の命を与えることも出来ません。イエス様がラザロを生き返らせられるのは、やがて、御自身を信じる者に、永遠の命を与えられる徴(しるし)なのです。イエス様はマルタにその信仰を与え、ラザロを生き返らせることに臨まれます。

イエス様は、妹のマリアにも、その信仰を与えたいと願われました。そこでマルタに、マリアを呼びに行かせられました。マリアはその事を聞くとすぐに立ち上がり、イエス様がおられる村の外へと急ぎました。弔問に訪れていたユダヤ人達は、

『マリアが墓に泣きに行くのだろう』  
と思ったようです。

『自分達も一緒に行って、泣いてあげよう。』  
と、それが当時の習慣でした。かれらは、マリアの後を追いました。すると、行き着いた所には、イエス様と弟子たちがいました。

マリアはイエス様を見るなり、その足もとに平伏し、姉マルタと同じ様に、

「主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」  
と言って泣きました。一緒に来たユダヤ人たちも泣きました。当時の習慣は大げさに泣くことが死者を弔う行為とされていました。

33節を見ますと、

「イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して言われた。

『どこに葬ったのか』

と記されています。イエス様はここで、死がもたらす、人間への悲しみを目の当たりにされ、罪の結果である死に対して義憤を覚えておられます。イエス様が

「どこに葬ったのか」

とお尋ねになると、

「主よ、来て御覧下さい」

と案内しています。イエス様は途中涙を流されました。それは、イエス様が悲しむ者の悲しみを引き受けられて、流された涙でした。マリアについて来たユダヤ人たちは、そのイエス様を見て、

「ご覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」

と言う人が居り、中には

「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないうようにはできなかつたのか」

と言う者もいました。

彼らはイエス様の、本当の心も力も知らず、評論家の様に、自分達の考えでイエス様を計っています。一方、イエス様だけは、神様の前に、神様の栄光を表す事を求めて、前に進んで行かれました。38節に、

「イエスは再び心に憤りを覚えて、墓に来られた」

と記されています。

イエス様はやがて、十字架に架かり、死と対峙されるのです。死に対して義憤を覚えておられました。墓に来られますと、墓は洞穴で、石で塞がれていました。人が出入り出来る程の入口を塞いでいる石は、円盤の様に加工して、溝を作って開閉するものであったでしょう。開閉には男性数人の力を必要としました。その石は死と生の世界を隔てていました。イエス様はその石を取りのけなさいと命じられました。すると、マルタが、

「主よ、4日もたっていますから、もうにおいます。」

と言ってイエス様の働きを止めようとした。彼らにとって、死んで4日目と言うのは、腐敗が始まり、蘇生の望みが完全に絶たれたと、考えられていました。マルタは人間の常識で生きていました。するとイエス様は、40節に、

「もし信じるなら、神の栄光が見られると、  
言っておいたではないか。」

と言われました。

イエス様はここで、マルタやマリア、一緒について来たユダヤ人たちに向かって、御自身に信頼し、御自身の言葉に従うかどうかを問われました。墓の石の蓋を開けることは、死の死臭、即ち、人間に死をもたらせる、罪の数々が吹き出て来る事です。人は誰もそれに耐えることは出来ません。それを引き受けて、制して下さる事が出来るのは、神の御子メシア以外にはないのです。イエス様を信じる者は、イエス様に委ねることによって、イエス様の言葉に従い、石を取りのけることができるでしょう。

人々は石を取りのけました。するとイエス様は天を仰いで言われました。41節に、  
「父よ、わたしの願いを聞き入れて下さって感謝します。わたしの願いを何時も聞いて下さる事を私は知っています。しかし、わたしがこう言うのは、周りにいる群衆のためです。あなたがわたしをお遣わしになった事を、彼らに信じさせるためです。」

イエス様は、父なる神様に全信頼して、こう祈られますと、墓の中に向かって、  
「ラザロ、出て来なさい」  
と大声で叫ばれました。

周りにいた人々は皆、墓の入口に目を注ぎ、固唾(かたづ)を呑んで見入りました。するとなんと死んでいたラザロが生き返って、手と足を布で巻かれたまま、墓から出て来たではありませんか。顔は覆いで包まれていました。イエス様は人々に、

「ほどいてやって、行かせなさい。」  
と命じられました。イエス様だけが、神の子メシアの身分と力をもって、人間を永遠の罪の滅びから救い、永遠の命を与えて、真の自由をお与えになることがお出来になるのです。

一方、イエス様がラザロを生き返らせた事に

よって、宗教指導者達は愈々(いよいよ)、イエス様を殺す計画を、それもローマ人の手で、十字架刑に掛けて殺す策を練り始めるのでした。しかし、それは全て、人類を限りなく愛し、永遠の罪の滅びから救い、御子を信じる者に、永遠の命を与えようとされた**神様の御計画**でした。イエス様はラザロを生き返らせる事によって、御自身が死を制し、永遠の命を与える事の出来る、**神の子メシア**であることを**証**されたのです。

私達も、心からイエス様に信頼し、イエス様こそ神の子メシアであることを確信して、罪深きこの身をイエス様にお委ねし、十字架の贖いに感謝しつつ、永遠の命を頂く喜びに生かされ、日々主と共に歩んで参りましょう。

お祈りを致します。  
憐れみ深い天の父なる神様

あなた様のご愛は永遠の滅びに向かう私達人間を救うために、罪の無い、神の御子イエス様を十字架に架けられ、救いの道を開かれたばかりか、イエス・キリストを信じる者に、永遠の命までお与えくださり、その計り知れない御愛に心から感謝します。

イエス様を神の子メシアと心から信じ、全存在を賭けて従う者としてください。

救い主イエス・キリストの  
お名前によってお祈り致します。  
アーメン。